

# 復活祭 40 日後 昇天祭

## 晩 課

首唱聖詠、大連禱、  
「カフィズマ」を誦せず。

### 祭-1

▽五旬経 P351

10 句を立つ。第六調

主や汝に呼ぶすみやかに我れに至りたまえ 主やわれに聞  
きたま え 主や汝に呼ぶすみやかに我れに至りたま え  
汝に呼ぶとき我が祈りの声をいれたま え 主やわれに聞き  
たま え ねがわくは我が祈りは香炉の香りのごとく 汝が  
かんばせの前にのぼり 我が手をあぐるは暮れの祭のごとく  
いれられん 主やわれにききたま え

(句) 我が<sup>たましい</sup>を<sup>ひとや</sup>獄より引き出して、我に爾の名を<sup>さんえい</sup>讃榮せしめ給へ。

主は天に升れり、世界に撫恤者を遣さん為なり、天は其宝座を備へ、雲は其途(みち)を備へたり。諸天使は人の己より上なるを見て驚き、父は其懐(ふところ)に在る同永在の者を迎へ、聖神<sup>ろ</sup>は其衆天使に命ず、諸侯よ、爾等の門を挙げよと。萬民は手を拍つべし、蓋ハリストスは先に在りし所に升起給へり。(二次)

(句) 爾恩<sup>おん</sup>を我に<sup>たま</sup>賜はん時、義人<sup>ぎじん</sup>は我を<sup>めぐ</sup>環らん。

(句) 主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

主よ、ヘルウィム等は爾の升天に驚きたり、爾等に坐する神が、雲に乗りて升るを見たればなり、我等は爾が恩恵の善なるに因りて、爾を讃揚す、光榮は爾に帰す。(二次)

(句) 願はくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

(句) 主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん為なり。父の光榮の輝耀なるハリストスよ、我等は聖山に於て爾の升るを見て、爾の顔の光りたる容を歌ひ、爾の苦を拝み、復活を尊み、光榮なる升天を讃榮す、我等を憐み給へ。(二次)

(句) 我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

(句) 主を望み、我が靈主を望み、彼の言を待む。

ハリストス生命を賜ふ主よ、使徒等は爾が雲に乗りて挙げらるるを見て、涙を垂れ、哀に満たされて日へり、主宰よ、矜憐に因りて愛せし我等爾の諸僕を遣して、孤子と為す勿れ、爾慈憐なるに因る、求む、我等に約せし如く、爾の至聖神<sup>°</sup>、我等の靈を照す者を遣し給へ。(二次)

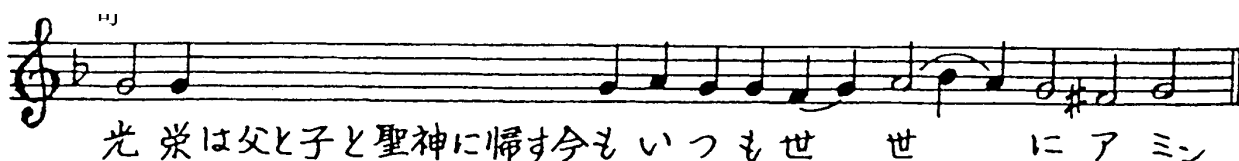
(句) 願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其の悉くの不法より贖はん。

(句) 萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

主よ、爾は定制の秘密を成し終へて、爾の門徒を橄欖山に攜へ、挙りて天の穹蒼を過れり。我が為に我の如く卑くなり、又常に離れざる處に升起し者よ、爾の至聖神<sup>°</sup>、我等の靈を照す者を遣し給へ。(二次)

(句) 蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

### 光榮、今も、第6調。



至甘きイイススよ、爾父の<sup>ふところ</sup>懷を離れずして、地の者と偕に人の如く居りて、今橄欖山より<sup>エレオン</sup>光榮の中に天に<sup>のぼ</sup>升起、我等の墜ちたる性を慈憐に因りて<sup>のぼ</sup>升せて、父と偕に坐せしめたり。故に天の無形の軍は奇蹟に驚き、懼れ慄きて爾の仁愛を讃揚せり。彼等と偕に我等地の者も、爾が我等に降ること、及び我等より升ることを讃榮して祈りて曰ふ、爾の升天を以て、門徒及び爾を生みし生神女を<sup>きわみ</sup>窮なき喜びに満たしし主よ、彼等の祈禱に藉りて、爾の大なる憐を以て、我等にも爾の選びたる者の喜を得しめ給へ。

→通常部分 (P7/8「聖にして福たる」へ戻る)

### ポロキメン

水曜日のポロキメンを歌う。



# 祭-2

## パレミヤ（旧約聖書の読み） ▽五旬経 P353

### イサイヤの預言書の読。(2:2-3)

主是くの如く言ふ、末の日に、主の山及び神の家は諸山の峰に顕けて、諸の陵より高く挙げられ、萬民流るる如く之に帰せん。多くの民は往きて言はん、来りて、主の山に登り、イヤコフの神の家に入らん、彼我等に其の途を教へん、我等其後に従はん。

### イサイヤの預言書の読。(62:10, 11, 12. 63:1, 2, 3, 7, 8, 9)

主是くの如く言ふ、往きて私の門に入れ、私の路を備へよ、我が民の為に大路を平坦にせよ、石を路より除け、諸民の為に燻を揚げよ。視よ、主は地の極にまで告げて云ふ、シオンの女に謂へ、視よ、爾の救者は来る、其賞は彼と偕に在り、其工の價は彼の前に在り。彼等は聖なる民、主に贖はれたる者と稱へられ、爾は尋ね得らたる者、棄てられざね邑と稱へられん。此の、エドムより来り、緋き衣を衣てワオソルより来る者、其服飾華美にして、大なる能力を以て厳しく歩み来る者は誰ぞ、是れ我なり、義を言ひ、救を施すに能力ある者なり。爾の服飾は胡為れぞ赤く、爾の衣は胡為れぞ酒酔を踐む者と等しき。我獨酒酔を踐めり、諸民の中一人も我と偕に在らざりき。我は凡そ主が我等に賜ひし所に循ひて、主の恩恵と主の光榮とを記憶し、亦其矜恤に因りて、其仁慈の多きに因りて、イズライリの家に施しし大なる恩を記憶せん。彼曰へり、誠に彼等は私の民なり、譎らざる諸子なりと、乃彼等の為に其凡の患難に於て救と為れり。中保者に非ず、天使に非ず、主自ら彼等を救へり、其愛、其矜恤に因りて、自ら彼等を贖ひ、古の諸日に於て彼等を容れ、彼等を挙げたり。

### ザハリヤの預言書の読。(14:1, 4, 8~11)

主是くの如く言ふ、視よ、主の日来る、當日には彼の足イエルサリムの前に東に向かえる橄欖山の上に立たん。其の日活ける水はイエルサリムより出でて、其の半ばは東の海に、其の半ばは西の海に流れん、夏も冬も是くの如くならん。主は全地の王と為らん、其の日には独り其の名あらん。全地はガワオンよりイエルサリムの南なるレムモンに至るまでの平地の如くならん、イエルサリムは己の處に高く立ちて、人の其の中に居ること、ウェニアミンの門より第一の門の處に、隅の門に至り、アナネイルの戌楼より王の酒酔にまで至らん。人其の中に住みて、呪詛復あらざらん、乃イエルサリムは安然として立たん。

→通常部分 P10 重連禱へ戻る

(増連禱が終わったら)

# 祭-3

## リティヤのスティヒラ

▽五旬経 P359

### 第一調

主よ、爾は降りし所の天に升りて、我等を孤子として遺すなかれ、願はくは爾の神<sup>°</sup> は来りて、世界に平安を賜はん、人を愛する主よ、爾が能力の行事を人の諸子に示し給へ。  
 父の形り難き懐を／離れざりしハリストスよ、爾は無原なる爾の父に升りしに、天軍は聖三の讃歌に増加を受けざりき、乃爾が人体を取りし後にも惟一の子にして、父の独生子なるを承け認めたり。主よ、爾が慈憐の多きに因りて我等を憐み給へ。

<以下略>

→通常部分へ戻る。 P11 リティヤへ

(リティヤが終わったら)

# 祭-4

## 挿句のスティヒラ

▽五旬経 P887

### 第2調

我等の神よ、爾は自ら欲せし如く生れ、自ら望みし如く現れ、肉体にて苦を受け、死を滅して死より復活せり、一切を満つる者にして、光栄の中に天に升り、我等に聖神<sup>°</sup> を遣し給へり、爾の神性を讃美讃栄せん為なり。

句 萬民よ、手を拍ち、歡の声を以て神に呼べ。

ハリストスよ、爾が橄欖山より挙げらるる時、天軍は見て互に呼べり、此れ誰ぞ、彼等に謂ふ、此れ勇毅能力の主、戦に能力ある主なり、此れ實に光栄の王なり。胡為れぞ其衣は赤き、彼はウォソルより来る、此れ肉體なり。爾親ら神なるに因りて至大なる者の右に坐して、我等に聖神<sup>°</sup> を遣し給へり、我等の靈を導きて救はん為なり。

句 神は呼ぶ聲に伴はれて升り、主は喇叭の聲に伴はれて升れり。

ハリストス神も萬有を神性にて満つる主よ、爾は橄欖山に於て門徒の前に光栄の中に天に升り、父の右に坐して、彼等に我が靈を照し、之を堅め、之を聖にする聖神<sup>°</sup> を遣し給へり。

光栄 今も 第六調

神は呼ぶ聲に伴はれて升り、主は喇叭の聲に伴はれて升れり、アダムの墜ちたる像を升せ、且撫恤者聖神<sup>°</sup> を遣して、我等の靈を聖にせん為なり。

→通常部分 P13 「シメオン祝文」へ戻る

「聖三祝文」「至聖三者」「天主経」

司祭 蓋<sup>けだし</sup> 国と権能と光栄は爾父と子と聖神<sup>°</sup> に帰す、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

(アミンに続いて)

# 祭-5

## 祭日のトロパリ 3回

▽五旬経 P360

餅の祝福に讃詞、四調。

ハリストス我等の神よ、爾は光栄の中に天に升起、聖神<sup>o</sup>を遣すを約して、門徒を喜ばしめ給へり、彼等爾の祝福に依りて、爾が神の子、世界の贖罪主たるを確められしに因る。

ハリストス 我等の かみよ 爾は光栄のうちに 天にのぼり  
 聖神を遣わすを やくして 門徒を喜ばしめ たまえり  
 彼ら爾の 祝福によりて 爾が かみの子  
 世界の贖罪主たるを 確かめられしに よる

→通常部分 P14「願わくは主の名は崇めほめられ……」へ戻る。

## 早課 六段の聖詠、大連禱に続いて

# 祭-6

## 主は神なり、祭日トロパリ

▽五旬経 P888

<【主は神なり】日本では3回だが、本来は下記の句に続いて4回。第4句に続いてトロパリ。>

主は神なり我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる、

(第1句) 主を尊み讃めよ、彼は仁慈にして其憐は世世にあればなり、

(第2句) 彼等我を囲み我を環れども、我主の名を以て之を敗れり、

(第3句) 我死せず、猶生きて主の行ふ所を伝へん、

(第4句) 工師が棄てし所の石は屋隅の首石となれり、是主のなす所にして我等の目に奇異なりとす、

主は神なり我等を照らせり主の名によつてきたるものは  
 あがめほめらる

トロパリ歌う（晩課の終わりと同じ）

ハリストス我等の神よ、爾は光栄の中に天に升起、聖神<sup>o</sup>を遣すを約して、門徒を喜ばしめ給へり、彼等爾の祝福に依りて、爾が神の子、世界の贖罪主たるを確められしに因る。

<カフィズマ、セダレンは省略>

→通常部分へ戻る P17【ポリエレイ】へ

ポリエレイに続いて讃歌

# 祭-7

【讃歌】（讃歌はロシア系のみのもので五旬経には出ていない。▽接続歌集 P342

生命を賜ふハリストスよ、我等爾を讃揚して、爾が至浄なる身と共にする神聖なる升天を尊む。

（句）萬民よ、手を拍ち、歓びの聲を以て神に呼べ、4 6 聖詠

蓋至上の主は畏るべくして、全地を治むる大王なり、…… アリルイヤ（3回）

（ズナメニイのメロディによる）

讃歌

いのちを たまう ハリストスや、  
われら なんじを さん よう して  
なんじが 至浄なる からだ と ともに する  
昇 天 を あがめ ほ-む  
アリルイヤ アリルイヤ ア-リル-イヤ

→通常部分 P18 へ戻る 【小連禱】【アンティフォン】4 調

# 祭-8

提綱、第四調。▽五句経 P362

## 第四調

神は呼ぶ聲に伴はれて升り、主は喇叭の聲に伴はれて升れり。

句 萬民よ、手を拍ち、歎の聲を以て神に呼べ。

ホロキメン

かみは 呼ぶ声に 伴われて のぼり

主は ラッパの 声に 伴われ て のぼれ り

輔祭 主に祈らん、(詠) 主憐れめよ

輔祭 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ

(詠) 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、

輔祭 (句) 神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ、

(詠) 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、

輔祭 凡そ呼吸ある者は

(詠) 主を讃め揚げよ、(2回半)

輔祭 我等に聖福音経を聴くを賜うを主・神に祷らん、

(詠) 主憐めよ、3次

輔祭 睿智粛みて立て、聖福音経を聴くべし、

司祭 衆人に平安、

(詠) 爾の神にも、

司祭 マルコ伝の聖福音経の読み、<マルコ 16:9~20>

(詠) 主や、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す、

彼の時七日の首の日朝早く、イイスス復活して先づマリヤ「マグダリナ」、即其曾て七の魔鬼を逐ひ出し、所の者に現れたり。婦往きて、先に彼と偕に在りし哀み哭ける者に告げたれども、彼等其生きて、之に見られたりと聞きて、信ぜざりき。其後彼等の中の二人が村に往く時、イイスス変りたる容を以て之に途に現れたり。二人返りて、餘の者に告げしに、彼等をも信ぜざりき。卒に十一門徒に其席坐の間に現れて、其信なきと心の頑なるとを責めたり、彼の復活したるを見し者を信ぜざりし故なり。又彼等に謂へり、全世界に往きて、福音を悉くの受造物に傳へよ、信じて洗を受くる者は救はれ、信ぜざる者は罪に定められん。信ずる者には斯の休徴は従はん、我が名に因りて魔鬼を逐ひ出し、新なる方言を言ひ、蛇を操り、毒を飲むとも、彼等を害せざらん、手を病者に按せば、愈ゆるを得ん。主は彼等に語りし後天に升り、神の右に坐せり。彼等は出で、四方に教を傳へ、主は彼等を相け、之に従ふ休徴を以て其言を固めたり、「アミン」。

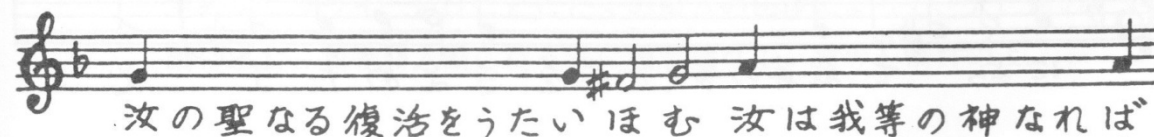
(詠) 主や、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す、



リスのふくかつをみて聖なる主イイスス独り罪なきものを



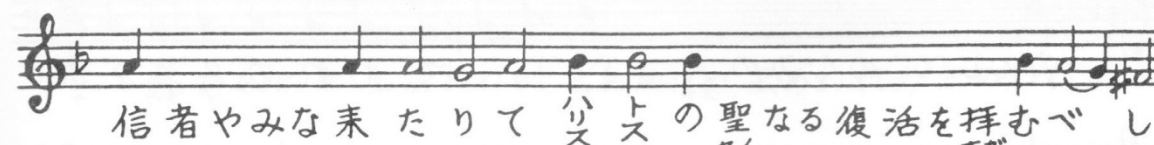
おがむべしリスヤ我等なんじの十字架をおがみ



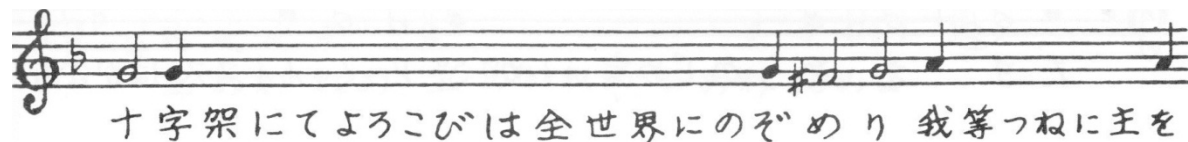
汝の聖なる復活をうたいほむ汝は我等の神なれば



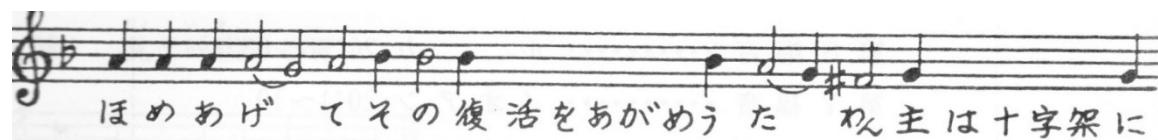
なり汝の外他の神を知らずただ汝の名をとの



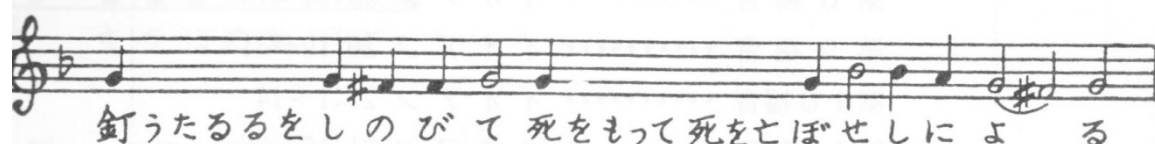
信者やみな来たりてリスの聖なる復活を拝むべし



十字架にてよろこびは全世界にのぞめり我等つねに主を

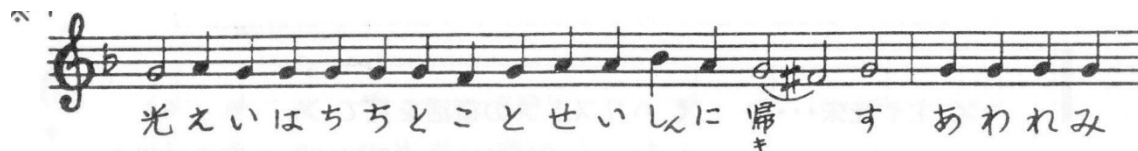


ほめあげてその復活をあがめうたねん主は十字架に

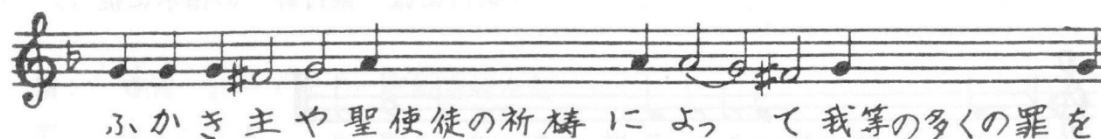


釘うたるるをしのびて死をもって死を亡ぼせしによる

## 50 聖詠 読む



光えいはちちとことせいしに帰すあわれみ



ふかき主や聖使徒の祈禱によつて我等の多くの罪を



きよめたま え いまもいつも世 世 に  
 ア ミン あわれみふかき主や 至聖なる生神女の祈禱  
 によつて我等の多くの罪をきよめたま え  
 神や汝の大いなるあわれみによつてわれをあわれ み  
 なんじがめぐみの大きによつてわれの不法を消し  
 たま え あらかじめ言いしがごとく イイススはかより  
 ふくかつしてわれらに永きいのちと大いなる  
 あわれみをたまえり

## 祭-9

## 福音後のステイヒラ

▽五旬経 P859

第六調。

今日上なる軍は／天に我等の性を見て、上升の異なる状に驚き、奇しみて互に言へり、此の来りし者は誰ぞ、その己の主宰たるを見て、天の門を挙ぐるを命じたり、彼等と偕に我等も、再び身と偕に彼處より来らんとする者を、萬民の審判者、及び全能の神として常に歌はん。

→通常部分 P20 へ戻る

【輔祭「神よ、爾の大いなる憐れみによって…」と「主憐れめよ」12回】(アミンに続いてカノンへ)

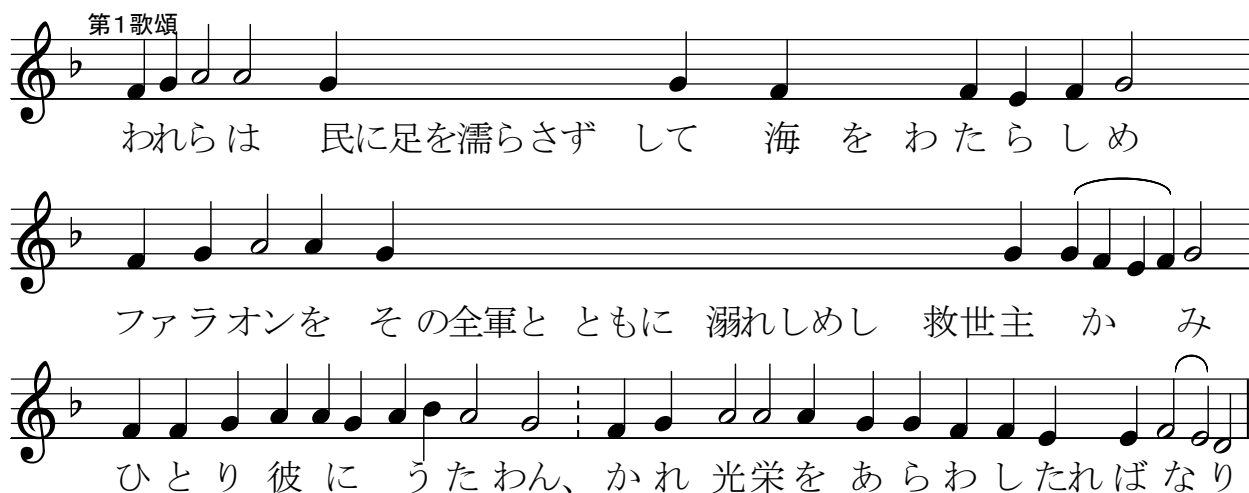
# 祭-10 カノン ▽五旬経 P892

第一の規程 ダマスクの聖イオアンの作 第五調

## 第一歌頌

イルモス 我等は、民に足を濡らさずして海を渡らしめ、ファラオンを其全軍と偕に溺れしめし救世主神、獨彼に歌はん、彼光栄を顕したればなり。

第1歌頌



われらは 民に足を濡らさずして 海をわたらしめ  
ファラオンを その全軍とともに 溺れしめし 救世主 かみ  
ひとり彼に うたわん、かれ 光栄をあらわしたればなり

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

我等衆人、ヘルワィムの肩に乗り光栄を以て升りて、我等を己と偕に父の右に坐せしめしハリストスに凱歌を歌はん、彼光栄を顕したればなり。

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

天使の會は神と人との中保者たるハリストスが、肉體と偕に至高きに在るを見て、驚きて、同心に凱歌を歌へり、彼光栄を顕したればなり。

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

我等皆、神を見しモイセイにシナイ山に現れて、律法を與へ、哉亂山より身にて升りし神に歌はん、彼光栄を顕したればなり。

「光栄は」「今も」(生神女讃詞)

至浄なる神の母よ、爾より身を取りて、父の懷を離れざりし神に常に祈りて、其造りし者を凡の危難より救はしめ給へ。

## 第3歌唱

イルモス ハリストスよ、爾の十字架の力にて我が思慮を堅め給へ、我が爾の救を施す升天を歌ひ讃めん為なり。

第3歌頌

ハリス トス よ 爾の 十字架の ちかから にて  
 我が おもい を 固め た ま え 我が なんじの  
 救い を 施す 昇 天を うたい 讃めん ため な り

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

生命を施すハリストス、人を愛する主よ、爾は父に升りて、爾の言ひ難き仁慈を以て、我が族を升せ給へり。

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

救世主よ、天使の軍は死すべき性の爾と偕に升るを見て、奇として、絶えず爾を讃め歌へり。

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

ハリストスよ、天使の會は爾が肉體と偕に升りしを見て、驚きて、爾の聖なる升天を讃め歌へり。

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

ハリストスよ、爾は腐敗に陥りし人性を起し、爾の升天を以て之を升せて、己と偕に我等を榮せり。

「光栄は」「今も」(生神女讃詞)

潔き者よ、爾の腹より出でし主に絶えず祈りて、爾神の母を歌ふ者を悪魔の誘惑より免れしめ給へ。

### 【小連禱】

輔祭 我等安和にして主に禱らん、

(詠) 主 憐れめよ

輔祭 上より降る安和と我等が<sup>たましい</sup>靈の救いの為に主に禱らん、

(詠) 主 憐れめよ

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女<sup>しょうしんじょ</sup>・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に<sup>ことごと</sup>悉くの我等の<sup>いのち</sup>生命を以て、ハリストス神に委託せん、

(詠) 主 爾に

司祭 (高声) 蓋爾は我等の神なり、我等光栄は爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、(詠)「アミン」

### 第四歌頌

イルモス 我十字架の力の風聲、天堂が是にて啓かれしを聞きてよべり、主よ、光栄は爾の力に帰す。天使の王よ、爾は光栄の中に升りて、父より我等に撫恤者を遣し給へり、故に我等よぶ、ハリストスよ、光栄は爾の升天に帰す。

第4歌頌

われ十字架の力のかぜのこえ 天堂が  
これにて啓かれしを 聞きて呼べり  
主よ 光栄は なんじのちからに 帰す

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

救世主が肉體と偕に父に升起し時、天使の軍は彼に驚きてよべり、ハリストスよ、光栄は爾の升天に帰す。

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

天使の軍は其上なる者によべり、ハリストス我が王、我等が父及び聖神<sup>o</sup>と偕に讃め歌ふ者の為に門を挙げよ。

「光栄は」「今も」(生神女讃詞)

童貞女は産みたれども、母に属することを覚えざりき、乃母にして、童貞女に止まれり、我等彼を讃め歌ひてよぶ、生神女よ、慶べよ

第五歌頌

イルモス 主よ、我等夙に興きて爾によぶ、我等を救ひ給へ、爾は我等の神なればなり、爾の外他の神を知らず。

第5歌頌

主よ 我等 ツトに興きて 爾に 呼ぶ 我等を  
すくい た ま え 爾は 我等の かみ なれば なり  
なんじのほか 他の神を 知らず

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

慈憐の主よ、爾は萬有を樂に満てて、肉體と偕に上天の軍に升起給へり。

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

天使の軍は爾の挙げらるるを見てよべり、我が王の為に門を挙げよ。

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

使徒等は救世主の升るを見て、戦きて我が王によべり、光栄は爾に帰す。

「光栄は」「今も」(生神女讃詞)

生神女よ、我等爾、生みし後に童貞女たる者を歌ふ、蓋爾は身にて神言を世界に生み給へり。

#### 第六歌頌

イルモス 主よ、淵は我を圍み、鯨は私の為に柩となれり、惟我爾人を愛する者によびしに、爾の右の手は我を拯ひ給へり。

第6歌頌

主よ 淵はわれをかこみくじらは 我のために  
ひつぎとなれり ただ我 爾人を愛する者を  
呼びしに なんじのみぎの手は  
われをすくい ためり

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

使徒等は今造物主が高處に挙げらるるを見て、聖神<sup>o</sup>を獲んとする望を楽しみ、且畏れてよべり、光栄は爾の升天に帰す。

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

ハリストスよ、天使は爾が門徒の前に立ちてよべり、爾等ハリストスが肉體と偕に升るを見し如く、是くの如く彼衆人の義なる審判者は復来らん。

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

我が救世主よ、天軍は爾が肉體と偕に高處に挙げらるるを見る時よびて曰へり、主宰よ、爾が人を愛する愛は大なる哉。

「光栄は」「今も」(生神女讃詞)

光栄なるマリヤ、正教の者の誉よ、我等宜しきに合ひて爾が焚けざる棘と山と、生ける梯と、天の門たるを崇め讃む。

#### 【小連禱】

輔祭 我等安和にして主に禱らん、

(詠) 主 憐れめよ

輔祭 上より降る安和と我等が<sup>たましい</sup>靈の救いの為に主に禱らん、

(詠) 主 憐れめよ

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光荣の女宰・<sup>しょうしんじょ</sup>生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に<sup>ことごと</sup>悉くの我等の<sup>いのち</sup>生命を以て、ハリストス神に委託せん、

(詠) 主 爾に

司祭 (高声) 蓋爾は平安の王及び我が霊の救主なり、我等光荣は爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

小讚詞 第六調

ハリストス我等の神よ、爾は我等に於ける定制を成し畢へて、地の者を天に合せて、光荣の中に升りたれども、何處よりも離れざりき、乃別るるなく留まりて、爾を愛する者に呼ぶ、我爾等と偕にす、人の爾等に敵するなし。

同讚詞

我等死すべき者は地に属する者を地に遺し、灰に属する者を塵に譲りて、来りて醒め興き、目と思とを高處に挙げ、望と心とを天の門に注ぎ、自ら橄欖山に在りて贖罪者が雲に載せらるるを見るに想ふべし、蓋彼處より主は天に升り、彼處に喜びて賜ふ者は其使徒に賜を分ち、父の如く彼等を慰め、子に於けるが如く彼等を堅め、誨へて、彼等に謂へり、我爾等に別れず、爾等と偕にす、人の爾等に敵するなし。

第七歌頌

イルモス 火の爐の中に歌へる少者を救ひ給ひし我が先祖の神は崇め讃めらる。

第7歌頌

火の 炉の <sup>いろり</sup> な かに うた える 少 者 を

す くい た ま い し 我 が 先 祖 の か - み は

崇 め 讃 め ら - - る

(附唱)主よ光荣は爾の聖なる昇天に帰す。

光れる雲に乗りて升りたる世界を救ひ給ひし我が先祖の神は崇め讃めらる。

(附唱)主よ光荣は爾の聖なる昇天に帰す。

救世主よ、爾は迷ひし性を肩に荷ひ、升りて、神父に攜へ給へり。

(附唱)主よ光荣は爾の聖なる昇天に帰す。

肉體を以て形なき父に升り給ひし我が先祖の神は崇め讃めらる。

(附唱)主よ光荣は爾の聖なる昇天に帰す。

救世主よ、爾は罪に殺されたる我が性を取りて、之を己の父に攜へ給へり。

「光荣は」「今も」(生神女讚詞)

童貞女より生れて、之を生神女と為し我が先祖の神は崇め讃めらる。

#### 第八歌頌

イルモス 世々の前に父より生れし子及び神、末の時に童貞女母より身を取りし者を、司祭等は歌へ、人々は萬世に崇め讃めよ。

第8歌頌



世 世 の さ き に 父 よ り 生 ま れ し 子 及 び か み  
す え の と き に 童 貞 女 母 よ り 身 を 取 り し  
も の - を 司 祭 等 は 讃 め う た え  
ひ と び と は 万 世 に あ が め 讃 め よ

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

生命を施すハリストス、二性を以て光栄の中に天に升りて、父と偕に坐する者を、司祭等は歌へ、人々は萬世に崇め讃めよ。

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

救世主よ、我等爾、造物を偶像の奴隷より免れしめて、之を自由の者として爾の父に進めし主を歌ひ、爾を萬世に崇め讃む。

(附唱)主よ光栄は爾の聖なる昇天に帰す。

己の降るを以て敵を倒し、己の升るを以て人を高くせし者を、司祭等は歌へ、人々は萬世に崇め讃めよ。

「父と子と聖神の一なる神を讃め揚げん」「今も」(生神女讃詞)

浄き生神女よ、爾はヘルウィムに超ゆる者と現れたり、其荷ひ奉る者を爾の腹に容れ給ひしに因る、我等人々無形の者と偕に彼を萬世に尊み崇む。

「ヘルウィムより尊く」に代へて左の附唱を歌ふ。

(附唱)我が霊よ、地より天に升起しハリストス、生命を賜ふ主を讃め揚げよ。

#### 第九歌頌

イルモス 爾悟り難く解き難く神の母と為り、時の中に於て時に縁らざる主を言ひ難く生みし者を、我等信者は心を一にして崇め讃む。

第9歌頌

我がたましいよ 地より天に昇りしハリストス  
いのちをたまう 主を 讃めあげよ  
なんじ 悟り難く解きがたく かみの母となり  
ときのうちに おいて 時によらざる 主を  
言いがたく 生みしものを われら 信者は  
こころを ひとつにして あがめ 讃む

(附唱)我が霊よ、地より天に升起しハリストス、生命を賜ふ主を讃め揚げよ。  
使徒等は爾世界の贖罪主、ハリストス神が神妙に挙げらるるを見て、敬み祝ひて讚美せり。  
ハリストスよ、諸天使は両性と一位になりし爾の肉體が高處に在るを見て、互に言へり、此は實に我等の神なり。

(附唱)我が霊よ、地より天に升起しハリストス、生命を賜ふ主を讃め揚げよ。  
ハリストス神よ、無形の者の品位は爾が雲に乗りて升るを見てよべり、光榮の王の為に門を挙げよ。  
我等は爾、地獄にまで降り、人を救ひ、己の升天にて之を高くせし主を崇め讃む。

「光榮は」「今も」生神女讚詞

慶べよ、生神女、ハリストス神の母よ、爾は曾て生みし者の今地より挙げらるるを見て、使徒等と偕に彼を讚美せり。

<以下省略>

### 【小連禱】

- 輔祭 我等安和にして主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ  
 輔祭 上より降る安和と我等が<sup>たましい</sup>霊の救いの為に主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ  
 輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に<sup>ことごと</sup>悉くの我等の<sup>いのち</sup>生命を以て、ハリストス神に委託せん、 (詠) 主 爾に  
 司祭 (高声) 蓋天の衆軍爾を讚揚す、我等も光榮は爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、 (詠) 「アミン」



エクサポスティラリー 自調 (ポドーベンメロディで)

ハリストスよ、門徒が仰ぎ視る時爾は父に升りて、偕に坐し給へり、天使等は前に進みてよべり、挙げよ、門を挙げよ、王が原始の光榮に升り給へばなり。

ハリス トスよ 門徒があおぎ 見る と き  
 なん じはちちに のぼ りて ともに 坐したまえり  
 天使らは まえに すす みて 呼 べり  
 挙 げよ、 門を 挙 げよ、  
 王 が 原 始の  
 光 えいに のぼ り た まえり

**祭 11** 【讃揚歌とステイヒラ】 ▽五旬経 P386

「凡そ呼吸ある者」に四句を立てて左の讃頌を歌ふ、第一調。

およそ いきあるものは主をほめあげよ 天より主  
 をほめあげよいとたかきにかれをほめあげよ  
 ほめ歌は汝かみにきすそのことごとくの神使や  
 かれをほめあげよそのことごとくの異<sup>ツ</sup>やかれをほめあ  
 げよほめ歌は汝かみに帰<sup>キ</sup>す

<以下スティヒラ略>

我等世に在る者は天使等の如く祝ひて、光栄の寶座に坐する神を歌ひて呼ば、聖なる哉爾天の父、爾同永在の言、聖なる哉爾も至聖神<sup>o</sup>や。

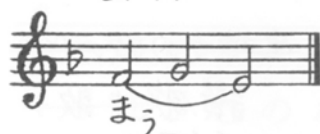
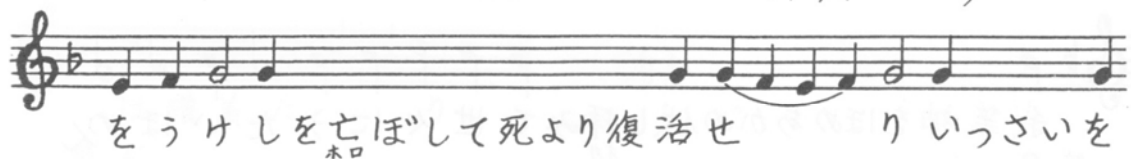
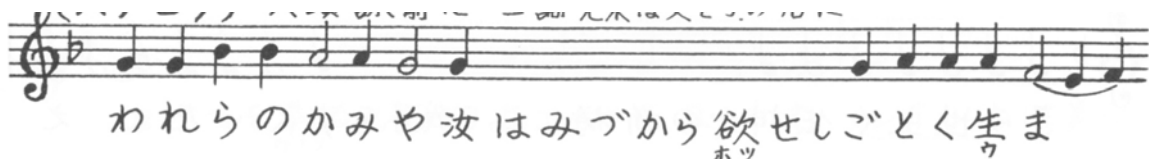
救世主よ、首品の天使は上升の異なるを視て、奇しみて互に言へり、此の見る所は何ぞ、見ゆる形にて人たる者は神の如く身と偕に諸天の上に升る。

言よ、ガリレヤの人は爾が身と偕に橄欖山より升りしを見て、天使等の彼等に呼ぶを聞けり、何ぞ仰ぎて立てる、彼は爾等が見し如く、復是くの如く身と偕に来らん。

我等世に在る者は天使等の如く祝ひて云々 同上

光栄 今も 第二調

我等の神よ、爾は自ら欲せし如く生れ、自ら望みし如く現れ、肉體にて苦を受け、死を滅して死よれ復活せり、一切を満つる者にして、光栄の中に天に升り、我等に聖神<sup>o</sup>を遣せり、爾の神性を讚美讚栄せん  
ん 為 な り 。



→通常部分 P22 に戻る 【大詠頌】を歌う

大頌栄のあと

# 祭 12

【祭日トロパリ】 第4調

ハリストス我等のかみよ 爾は光栄のうちに 天にのぼり  
聖神を遣わすを やくして 門徒を喜ばしめ たまえり  
彼ら爾の 祝福によりて 爾が かみの子  
世界の贖罪主たるを 確かめられしに よる

→通常部分 P27 に戻る

【重連祷、増連祷】 早課の終わり。発放詞。

## 時課

<時課の変更箇所は、トロパリコンダクのみ>

讃詞 4調

ハリストス我等の神よ、爾は光栄の中に天に升起、聖神<sup>o</sup>を遣すを約して、門徒を喜ばしめ給へり、彼等爾の祝福に依りて、爾が神の子、世界の贖罪主たるを確かめられしに因る。

小讃詞 第六調

ハリストス我等の神よ、爾は我等に於ける定制を成し畢へて、地の者を天に合せて、光栄の中に升りたれども、何處よりも離れざりき、乃別るるなく留まりて、爾を愛する者に呼ぶ、我爾等と偕にす、人の爾等に敵するなし。